

はじめに

「モノより人とかかわる仕事がしたい」。学生時代、私はそう考え学校の先生になろうと決めました。自分自身の学校生活が楽しかったことに加え、信頼できる先生に出会えたことも影響していたと思います。

ただ、障害児教育のことは一切頭にありませんでした。大学でも障害児教育について学ぶことはなく、教員採用試験のときは希望さえしていませんでした。

普通校で数学の面白さを伝えられたらなあと漠然と考えている程度でしたが、面接の話がきたのは思いがけず障害児学校（知的障害）からだったのです。そのときの校長とのやりとりです。

「君の大学での卒論のテーマは？」

「はい、『レンズ空間におけるブリッジ分解の考察』です」

「君が大学で勉強したことは、この世界では一切役に立たないかもしれないけど、それでもいいかい？」

「はい！　いいです！」

迷うことなく即答できたのは、校内を案内されたときに出会った子どもたちを「かわいい」

と感じたから。ただそれだけでした。

こうして私は障害児学校の先生になりました。

障害児教育のことも福祉のこともまつたく知らないままのスタートでした。知的障害の子どもたちとどうかかわればいいのか？ とりあえず子どもの出方に反射的に反応するような行き当たりばつたりのかかわりだつたと思います。歌が好きな子にはリクエストに応じてひたすら歌い、絵が好きな子とは毎日お絵かきをしました。（目の前の子どもがどうすれば笑つてくれるかなあ）という思いだけでした。ただ、それだけではうまくいくはずもなく、授業を嫌がる子、パニックになつた子の気持ちがわからずオロオロする日々が続きました。

教員2年目に受け持つた昌樹君（自閉症、知的障害、高1）には、今も申し訳ない気持ちしかありません。彼が入所していた施設でのカンファレンスのことです。

「彼は時々言葉を発しますよね」

「そうそう、それに歌を歌うときもありますよね」

施設職員と先輩教師の間で話が盛り上がる中、私だけが（えつ、言葉？ 歌？）とついていけませんでした。私には昌樹君が発する「オワワ～。ピュピュッ」などの声は「意味のない音」としてしか聞こえていなかつたのです。あのときの身の縮む思いといつたら例えようもあ

りません。

今まで気づかなかつただけで、きっと私に思いをわかつてもらえずパニックになつてしまつたこともあるんだろうなと気持ちが落ち込みました。

しかし、いくら焦つても昌樹君の気持ちをつかむことはできず、悶々とした日々が過ぎていきました。この頃の私は、彼とのかかわりに自信がもてず、心が萎縮してしまつていたと思います。

そして、ある日、また昌樹君が泣き叫びながら自分の頭を叩き始めてしまいました。興奮状態がおさまった後もさめざめと泣きながら横たわる昌樹君に、私はどう接すればいいのかわからぬまま、ただそばに座つてることしかできませんでした。

するとそのときです。ようやく落ち着きを取り戻した昌樹君がニコニコしながら私の頬に唇を寄せてきたのです。

（もう大丈夫。そばにいてくれてありがとう）

何もできない私にそう言つてくれているようで胸が熱くなりました。こんな自分にも、パニックから立ち直るまで付き合つてくれたことに親愛の情を示してくれるのか。だったら、どんなに時間がかかるもいい、パニックになつたときは、ちゃんと落ち着くまでそばにいようと心に決めました。そして、いつか昌樹君の気持ちをしつかりと汲み取れるようになりたいとようやく前向きになることができました。

あれから何人の子どもたちと出会ってきました。思うようにいかない子どもとのかかわり。考えても考えてもわからない子どもの気持ち。そんな先の見えない子どもとの日々を繰り返しながらも、（あつ、そんな風に思っていたのか）（えつ、そんなねがいがあつたのか）と気づかされる瞬間がありました。

こだわりの強い自閉症児が自分のこだわりを食い止めようと必死に葛藤したり、不登校になつた子が自分の居場所を見つけて変わっていく姿を目の当たりにしたとき、彼らの本当のねがいは何かを教えられた思いがしました。

彼らとともにした時間は、私にとって大切なタカラモノです。この本を通して、「出会った子どもたちが教えてくれたタカラモノ」をお伝えできればと思います。

私の教師人生は、子どもから学んだことの積み重ねと言つていいのですから。

佐藤比呂二